

令和5年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第7号（4月予報）

令和6年3月22日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は4月を主とします。次回の発表は令和6年4月24日の予定です。 ◇農作物病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。 最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。 https://pesticide.maff.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 https://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	苗いもちの発生量は平年並と予想されます。育苗施設周辺や施設内に稲わら・籾殻を置かず、種子消毒と育苗期のいもち防除を必ず実施してください。 もみ枯細菌病の発生量は多いと予想されます。育苗施設を清掃し、育苗資材の消毒を実施してください。また、出芽時の高温や長期の被覆、育苗施設内の通風不良は発病を助長するため、適切な育苗管理に努めてください。
果 樹	りんごでは、腐らん病の発生量が県中央部・県南部でやや多いと予想されます。樹体検診を実施して早期発見と適正な処置をしてください。また、黒星病は県中央部・県南部で感染時期が早く、感染量が多いと予想されますので、適期に薬剤を散布してください。 なしでは、黒星病の感染時期がやや早く、感染量が多いと予想されます。適期に薬剤を散布してください。また、紅粒がんしゅ病の発生量が多いと予想されます。病枝、病患部は見つけ次第直ちに切り取って適切に処分してください。 ぶどうでは、黒とう病の感染時期がやや早く、感染量が多いと予想されます。前年に発生があった園地では発芽前に薬剤を散布してください。 近年、果樹の生態が早まってきているので、薬剤の散布が遅れないように注意してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	苗いもち	全県	—	—	平年並
	苗立枯病	全県	—	—	やや多い
	ばか苗病	全県	—	—	やや少ない
	もみ枯細菌病	全県	—	—	多い
	苗立枯細菌病	全県	—	—	平年並
りんご	腐らん病	県北部	—	少ない	平年並
		県中央部・県南部	—	平年並	やや多い
	モニリア病 (葉ぐされ)	県北部	やや早い	—	やや少ない
		県中央部・県南部	早い	—	やや少ない
	黒星病	県北部	やや早い	—	平年並
		県中央部・県南部	早い	—	多い
	リンゴハダニ	全県	早い	平年並	平年並
ハマキムシ類	全県	早い	—	平年並	
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	やや早い	—	多い
	紅粒がんしゅ病	県北部・県中央部	—	—	多い
	胴枯病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	やや早い	平年並	平年並
	ニセナシサビダニ	県北部・県中央部	やや早い	—	—
ぶどう	黒とう病	県南部	やや早い	—	多い

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 苗いもち (苗の葉いもちを含む)	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、前年の穂いもちの発生量はやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、自家採種せず、県内の採種は産種子等を使用する。

イ、育苗施設の周辺や施設内に稲わら・籾殻を置かない。

ウ、種子消毒を行う。また、種子消毒の注意事項は、「3. ばか苗病」を参照する。

エ、育苗期いもち防除は、次のいずれかの方法で必ず実施し、育苗施設から本田への伝染・発病苗の持ち込みを防ぐ。

① 播種時～播種14日後にベンレート水和剤500倍液を箱当たり500mL、又は播種時～播種7日後頃に1,000倍液を箱当たり1Lかん注する。

② 緑化始期に、ビームゾル500倍液を箱当たり500mLかん注する。

オ、種子消毒にタフブロック又はエコホープD Jを使用した場合は、防除効果を低下させるので、エ①の播種時処理は行わない。

カ、ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じる。

キ、本田の葉いもちを対象として床土混和处理又は播種時(覆土前)処理を行う箱施用剤は、苗いもち(苗の葉いもちを含む)に対する防除効果がないため、育苗期いもち防除(エの殺菌剤)を必ず組み合わせる。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 苗立枯病 (ピシウム菌)	—	やや多い (前年よりやや少ない)
(リゾープス菌)	—	やや少ない (前年並)
	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+) (ピシウム菌 /-、リゾープス菌 /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗施設を清掃する。また、育苗箱などは十分洗浄し、「イチバン」や「ケミクロンG」で消毒する。

イ、人工培土を使用する。

ウ、育苗期間の温度管理と水管理を適正に行う。

エ、次の薬剤で防除を行う。

使用時期	農薬名	使用量又は希釈倍数	散布液量(箱当たり)	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾーパス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤	10～15g/箱	—	○					
	タチガレエースM粉剤	6～8g/箱	—	○	○				
	ナエファイン粉剤	6～8g/箱	—	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤	4,000倍	500mL	○					
		8,000倍	1 L						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500mL			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍	500mL		○	○	○		
	タチガレエースM液剤	1,000倍	500mL	○	○				
		2,000倍	1 L						
	ナエファインフロアブル	1,000倍	500mL	○	○	○			
		2,000倍	1 L						
	ヘッド顆粒水和剤 ¹⁾	500倍	500mL	○					
		1,000倍	1 L						
ベンレート水和剤	500倍	500mL		○		○			
	1,000倍	1 L							
ランマンフロアブル	1,000倍	500mL	○						
出芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500mL	○	○				
		1,000倍							
	バリダシン液剤5	1,000倍						○	○
	ランマンフロアブル ²⁾	1,000倍		○					

1) イネミズゾウムシ、イネドロオウムシとの同時防除が可能である。

2) 使用時期は緑化始期までとする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ばか苗病	—	やや少ない(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(/ -)。

イ、前年の本田での発生量は平年並であった(/ ±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、自家採種せず、県内の採種は産種子等を使用する。

イ、種子予措をする予定の作業施設やその周辺を清掃し、伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか、粉じん等を除去する。

ウ、種子消毒を行う。種子消毒の防除効果は、浸種水温10～15℃で高いことから、水温10℃以上が確保できる4月上旬を目安に浸種を開始する。

エ、高濃度短時間浸漬及び低濃度長時間浸漬では、消毒効果の安定・向上を図るため、浸種開始後2日間は水のかけ流し、循環や交換をしない。

オ、塗沫法及び湿粉衣法による消毒種子又は、消毒剤吹き付け・塗沫済み種子では、種子表面に付着した薬剤が浸種後に水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高くなった状態で消毒効果を発揮する。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。

カ、複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で同時に浸種・催芽をしない。また、品種や防除方法が変わるごとに容器を十分に洗浄する。

キ、消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシート等に置かない。消毒後の種子を載せるパレットやシート等は十分に洗浄した清潔なものを使用する。

- ク、周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、浸種・催芽時は容器に蓋をする。
- ケ、浸種時の水量は、種子 1 kg に対し水約 3.5 L とし、水温は 10～15℃ になるように努める。水温が低い場合は温水で調整する。浸種は水道水、井戸水を用いて水槽で行い、河川や湖沼の水は使用しない。
- コ、浸種期間は浸種水温 10℃ で 6～8 日、14℃ で 6 日程度とし、安定した薬効を確保するために、水交換は 2～3 回とする。
- サ、催芽は 30～32℃ で行う。
- シ、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。
- ス、出芽までの温度が低いと発病が多くなりやすいので、被覆資材等による保温に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. もみ枯細菌病	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう 1 か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、前年の発生量は多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、育苗施設を清掃する。また、育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロン G」などで消毒する。
- イ、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。
- ウ、所定の播種量を守り、厚播きはしない。
- エ、出芽温度は 32℃ を超えないようにし、被覆期間を過剰に長くしない。また、出芽後の再被覆は行わない。
- オ、緑化期以降はハウスの開閉をこまめに行い、25℃ 以上にならないようにする。また、通風を良くし、過湿にしない。
- カ、過剰なかん水は被害を拡大させるため行わない。
- キ、種子消毒は本病に効果のある薬剤を使用し、「3. ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 苗立枯細菌病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう 1 か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、前年の発生量はやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、「4. もみ枯細菌病」を参照する。

6. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
褐条病	—	—	やや少ない	近年の発生はやや少なく推移しており、「4. もみ枯細菌病」を参照する。

B りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 腐らん病	—	県北部：平年並 (前年よりやや少ない) 県中央部・県南部：やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、県北部の3月1～2半旬の巡回調査における発病樹率は1.0%（平年3.6%）で低く、発病地点率は33.3%（平年34.5%）で平年並だった（ /-）。

ウ、県中央部・県南部の3月1～2半旬の巡回調査における発病樹率は0.7%（平年0.6%）、発病地点率は15.4%（平年11.9%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、雪害を受けた部位は早めに整形し、伐採した枝は園内に放置せず焼却する。

イ、樹体検診を実施し、早期発見と適正な処置に努める。

ウ、泥巻きは、病患部を削り取り、水を加えて団子状にした草つき土で覆い、ビニール等を巻く。1年後には取り除いて治癒状況を確認し、治癒していない場合には再度行う。

エ、雪害の整形部及び剪定後の切口にはトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。

オ、枝腐らんを剪去した後の切口及び病斑の削り取り後（健全部を含め紡すい状に大きく削る）にはトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。なお、剪去した枝、削り屑は放置せず焼却するか園外に搬出する。

カ、トップジンMオイルペーストは成木の胴腐らんの削り取り後のみに使用し、剪定及び枝腐らん剪去後の切口には使用しない（薬害防止）。

キ、発芽前に石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モニリア病 (葉ぐされ)	県北部：やや早い（-） 県中央部・県南部 ：早い（-）	県北部：やや少ない (前年よりやや少ない) 県中央部・県南部 ：やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。

イ、かづの果樹センター（鹿角市）における3月20日現在のふじの予測発芽日は、4月8日（平年差+1日）である（±/ ）。

ウ、果樹試験場（横手市）における3月22日現在のふじの予測発芽日は、3月23日（平年差-10日）である（-/ ）。

エ、前年の実ぐされ発生量から、県北部、県中央部・県南部の越冬伝染源量はいずれもやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ひこばえは、伝染源となるため剪去する。
- イ、4月下旬によく見られる葉ぐされは見つけ次第摘み取り、焼却又は土中に埋める。
- ウ、例年、発病が見られる園地では、芽出し10日後に保護殺菌剤としてベフラン液剤25（RACコード：M7）、ストライド顆粒水和剤（同：M11）、デランフロアブル（同：M9）、パスポート顆粒水和剤（同：M5）のいずれかを散布する。
- エ、発病が少ない園地では、治療防除剤として開花直前にDMI剤（RACコード：3）のアンビルフロアブル等、SDHI剤（同：7）のカナメフロアブル等のいずれかを散布する。
- オ、発病が多い場合は、葉ぐされ発生盛期（開花1週間前～開花直前）に治療防除剤としてトップジンM水和剤（同：1）を散布する。なお、本剤に展着剤としてニーズを加用すると効果が高まる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 黒星病	県北部：やや早い（－）	県北部：平年並（－）
	県中央部・県南部：早い（－）	県中央部・県南部：多い（－）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。
- イ、かづの果樹センター（鹿角市）における3月20日現在のふじの予測発芽日は、4月8日（平年差+1日）である（±/ ）。
- ウ、果樹試験場（横手市）における3月22日現在のふじの予測発芽日は、3月23日（平年差-10日）である（－/ ）。
- エ、前年9月の発生量から、越冬量は県北部が平年並（ /±）、県中央部・県南部が多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、展葉期の防除は、芽出し10日後を目安に、ベフラン液剤25（RACコード：M7）を散布する。
- イ、前年までに黒星病が発生した園地では上記アの散布10日後頃にパスポート顆粒水和剤（RACコード：M5）を散布する。
- ウ、開花直前と落花直後の薬剤は過去2年間の発生状況に応じて以下の点に注意して選択する。
 - ① 過去2年間に発生がなかった園地では、開花直前と落花直後にDMI剤（RACコード：3）のオンリーワンフロアブル、アンビルフロアブル等が使用できる。
 - ② 過去2年間に発生があった園地では、開花直前にSDHI剤（RACコード：7）のカナメフロアブル、落花直後にユニックス顆粒水和剤47（同：9）又はミギワ20フロアブル（同：52）を選択する。
 - ③ 耐性菌の発生を抑制するため、DMI剤又はSDHI剤を使用する際は必ず保護殺菌剤のチオノックフロアブル、ジマンダイセン水和剤（RACコード：M3）等を混用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. リンゴハダニ	やや早い（－）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/ ）。

イ、3月1～2半旬の巡回調査における越冬卵の発生短果枝率は0%（平年0%）、発生地点率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、芽出し前の防除が未実施の園は、芽出し10日後までにスプレーオイル、トモノールS、ハーベストオイルのいずれかの100倍液を散布する。前年に発生が見られず、越冬卵も確認されなかった園地では薬剤散布を省略してもよい。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ハマキムシ類	早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（- / ）。

イ、かづの果樹センター（鹿角市）における3月20日現在のふじの予測発芽日は、4月8日（平年差+1日）である（± / ）。

ウ、果樹試験場（横手市）における3月22日現在のふじの予測発芽日は、3月23日（平年差-10日）である（- / ）。

エ、前年9月の発生量から、越冬量は平年並と推定される（ /± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花直前又は落花直後にIGR剤（RACコード：15又は18）、BT剤（同：11A）、ジアミド系剤（同：28）のいずれかを散布する。特に、ミダレカクモンハマキが多く開花期間中に被害（巻葉）が目立つ園地では、落花直後の散布を必ず実施する。

イ、訪花昆虫保護のため、開花期間中は薬剤を散布せず、開花直前及び落花直後は上記ア以外の系統の殺虫剤を散布しない。

ウ、マッチ乳剤は、落花10日後から6月下旬まで使用しない（サビ果）。

C なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 黒星病	やや早い（-）	多い（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（- /± ）。

イ、果樹試験場（潟上市）における3月18日現在の幸水の予測発芽日は4月3日（平年差-1日）である（± / ）。

ウ、前年8月の発生量から、越冬量は多いと推定される（ /+ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、落葉は一次伝染源となるので、園内に残っている場合は、発芽前までに集めて土中深く埋めるなど適切に処理する。

イ、芽りん片から芽基部への感染防止のため、発芽前にアルタベールフロアブル60倍又は石灰硫黄合剤10倍液を散布する。

ウ、落葉からの感染防止のため、発芽2週間後に保護殺菌剤として、チオノックフロアブル500倍、トレノックスフロアブル500倍、ベルコート水和剤1,000倍液のいずれかを散布する。前年に黒星病の発生した園地では、これらの保護殺菌剤にSDHI剤（RACコード：7）のカナメフ

ロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバーなどを加用する。

エ、開花直前の防除は、保護殺菌剤にSDHI剤、DMI剤（RACコード：3）、DHODHI剤（同：52）のいずれかを加用する。ただし、前年に黒星病の発生した園地では、保護殺菌剤にスコア顆粒水和剤を2,000倍で加用する。

オ、耐性菌の発生を抑制するため、RACコードが3（DMI剤）、11（QoI剤）、7（SDHI剤）、52（DHODHI剤）は年間2回以内の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 紅粒がんしゅ病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

イ、前年11月の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、4月はせん定痕が最も多い時期であり、園地に伝染源があると降雨により感染するため、病枝、病患部は見つけ次第直ちに削り取って適切に処分する。

イ、せん定した枝は伝染源となる可能性があるため、園内に置かず、直ちに適切に処分する。

ウ、発病部の切り戻しや削り取りの跡にはトップジンMペーストの原液を塗布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. 胴枯病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

イ、前年11月の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、耕種的防除は、「2. 紅粒がんしゅ病」の項を参照する。

イ、発病部の切り戻しや削り取りの跡にはトップジンMペースト又はバッチレートの原液を塗布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. リンゴハダニ	やや早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（-/ ）。

イ、3月1～3半旬の巡回調査における越冬卵の発生短果枝率は0%（平年0%）、発生地点率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年秋期に発生が見られた園地や越冬卵が見られる園地では、発芽前にアルタベールフロアブル40倍又はハーベストオイル50倍液を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ニセナシサビダニ	やや早い (-)	-

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (-/)。
- イ、果樹試験場(潟上市)における3月18日現在の幸水の予測発芽日は4月3日(平年差-1日)である(±/)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発芽前に石灰硫黄合剤10倍液を散布する。
- イ、前年発生が確認された園地では、発芽2週間後～新梢伸長初期にコテツフロアブルを散布する。ただし、コテツフロアブルはミツバチ等へ悪影響があるため、訪花昆虫を利用する園地では使用しない。

6. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	感染量(発生量)		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
赤星病	やや早い	-	平年並	黒星病との同時防除に努める。

D ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 黒とう病	やや早い (-)	多い (-)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (-/±)。
- イ、前年7月の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、雨滴で伝染するため、伝染源となる前年の被害枝(結果母枝)や巻きひげは降雨前に切り取って処分する。
- イ、休眠期の散布は温暖で風の少ない日に行い、散布むらのないようにする。
- ウ、前年に本病の発生が見られた園地では、発芽直前にデランフロアブル200倍、ベンレート水和剤200倍、ベンレートT水和剤200倍、パスポート顆粒水和剤250倍、ベフラン液剤250倍液のいずれかを散布する。
- エ、シャインマスカットなどの欧州系品種やスチューベンは発生が多いので、休眠期の防除を徹底する。特に、若木は新梢の被害が大きくなりやすいので注意する。

IV. 気象予報

令和6年3月21日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（3月23日～4月22日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

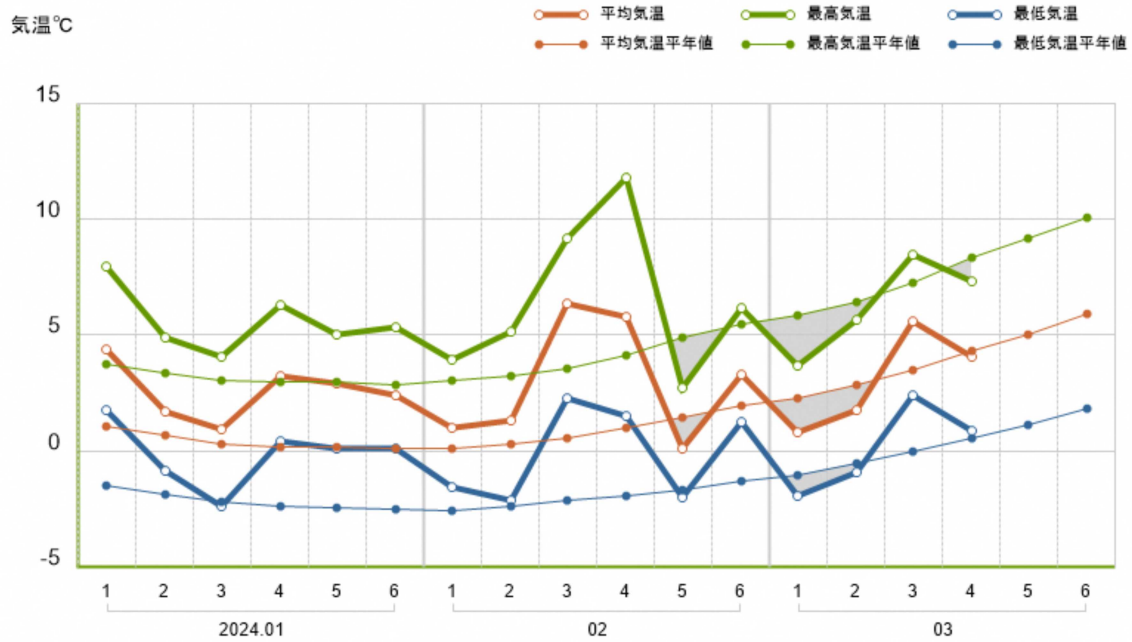
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	30%	60%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

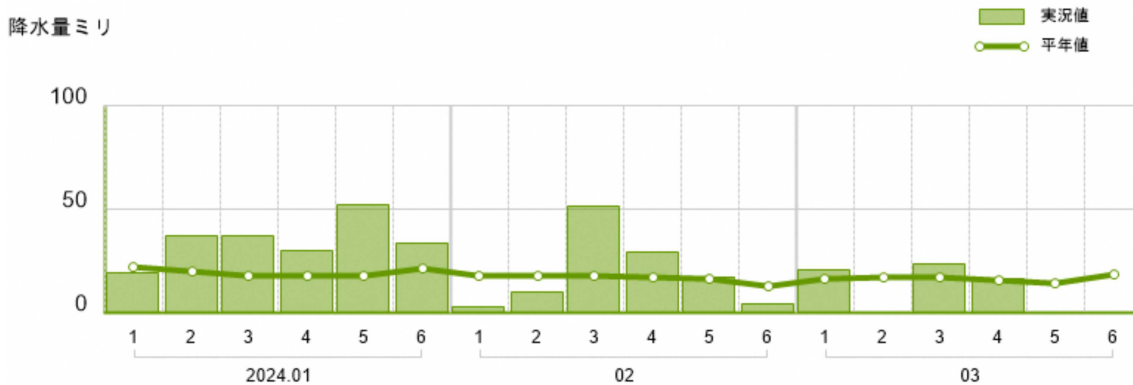
	低い	平年並	高い
3/23～3/29（1週目）	10%	40%	50%
3/30～4/5（2週目）	10%	30%	60%
4/6～4/19（3～4週目）	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～3月4半旬 秋田県農業気象システムより)

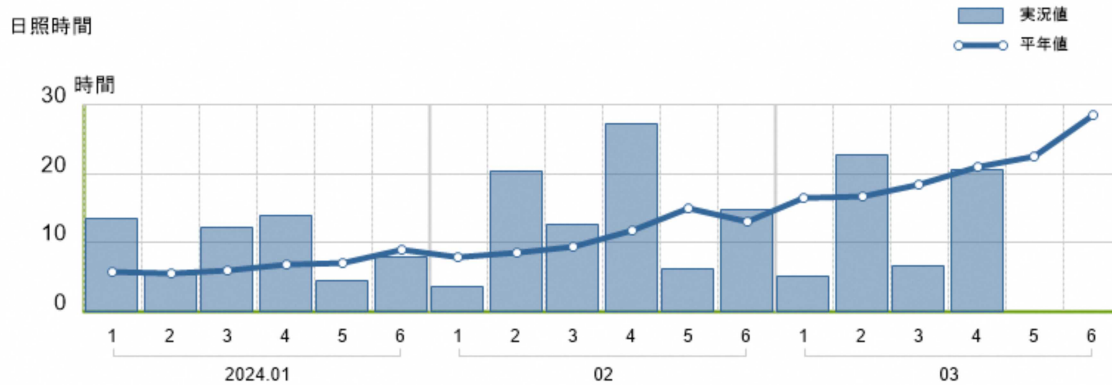
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬をハウス内土壌に浸透させないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で使用してください。
詳細は、令和6年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。
- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。
- 農薬取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。